

編 集 後 記

本号は陥凹性早期胃癌の経過の特集である。春の消化器病学会・内視鏡学会の合同シンポジウムでとりあげられたテーマである。これも近年胃病変の診断が発達し、ことに癌病変を早期にとらえることが可能となり、胃癌の発育の様相に種々な問題が提示されたためである。

胃癌巣内の潰瘍は縮小しないというのが従来の常識であり、これが良性潰瘍との経過観察上の一つの大きな鑑別点とされていたわけであるが、最近諸家の研究は癌巣内の潰瘍の縮小・消失するもののあることを明らかにし、これらから村上教授、佐野博士の潰瘍癌の分類とそれらの関係―悪性サイクルを説明する考え方が生れた。

これらのいきさつは、大森・中島・堀之内・川井諸博士の綜説にくわしく述べられているほか、村上教授司会の座談会にもわかり易く述べられ、現時点における諸家の考え方がよく理解できよう。この方面の研究は日本独自のものであり、今後の発展が大いに期待されるところである。

展望欄近藤教授らの胃潰瘍の薬物治療の現況と今後の期待、大変参考になりました。本誌の性格上、診断面に重点がおかれておりますが、今後は治療の実際についても、もっと具体的な内容をもったものを掲載してはと考えています。

また、高木博士らの十二指腸ファイバースコープの研究、内視鏡学もだんだんと奥へ進んで、いよいよ十二指腸に移ります。開拓者の一人として、すでに立派な成果を挙げられた点、敬服しております。

そのほか症例報告、技術解説いずれも興味深く読ませていただきました。

今年も終りに近づきました。来年も大いに頑張らしましょう。

<常岡 健二>

<編集> 早期胃癌研究会